

# 舞臺 艷歌

山田風太郎



YV-F-MUR 05-

文  
春  
文  
庫



文春文庫

183—9

# エドの舞踏会

定価はカバーに  
表示してあります

1986年1月25日 第1刷

著 者 山田風太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-718309-9

文庫

# エドの舞踏会

山田風太郎



文藝春秋



目次

序曲・鹿鳴館への誘い

七

井上馨夫人

四〇

伊藤博文夫人

八一

山県有朋夫人

一〇六

黒田清隆夫人

一四八

森有礼夫人

一九九

大隈重信夫人

二四七

陸奥宗光夫人

二九七

ル・ジャンドル夫人

三四七

終曲・鹿鳴館の花

三八七

解説・中島河太郎

三九一



# エドの舞踏会



序曲・鹿鳴館への誘い

「行程一時間、この舞踏会への列車はエドに着く」

小説「お菊さん」で知られるフランスの作家ピエール・ロティは、明治十八年の新橋停車場の風景をこんな風にかく。彼は東京を故意にエドと呼んでいる。

「私たちはロンドンかメルボルンか、それともニューヨークにでも到着したのだろうか。停車場の周囲には、煉瓦作りの高樓が、アメリカ風の醜悪さでそびえている。ガス燈がならんでいるので、長いまっすぐな街路は遠方までずっと見通せる。冷たい大気の中には、電線がいちめんに張りめぐらされ、さまざまな方向へ、鉄道馬車が鈴や警笛の音をたてて出発する。」

とかくするうちに、先刻から私たちを待ち受けていたらしい、全身黒衣の見なれぬ男の一群が、私たちを迎えに飛んで来る。それはジン・リキ・サンである」

当時、東京に電線がいちめんに張りめぐらされていたというのは、ロティの回顧による錯覚と思われるが、それはともかく、その明治十八年の、正確に言えば十一月五日の午後四時ごろ、ち

ようど横浜から汽車が到着して、降りて来る人、これから乗ろうとする人、さらに右のごとく人力俵のむれが雑踏している新橋停車場前の広場に、一台の馬車がとまった。

四人乗りの、あきらかに大官用の箱馬車だ。

そこから一人の異人が下り立った。しゃれた口髭をはやし、粹<sup>いき</sup>な士官姿の——どうやら海軍将校らしい服装で——その異人は馬車に向って挙手の敬礼をし、これも地に下りた御者<sup>ぎよしや</sup>に、「メルシイ」と会釈<sup>えしやく</sup>して、停車場のほうへ大股<sup>おほまた</sup>に歩み去った。

御者が、馬車の扉をしめようとするのと、

「待て」

と、中の人物が窓の外を見て大声をかけた。

「山本少佐じゃなかか？」

停車場のほうからやって来て、群衆とともにそばを通りかかろうとしていた、これは日本の海軍将校が顔をふりむけて、

「おう、西郷閣下でござりまするか」

と、さけんで、敬礼した。

「どこへゆくか」

「うちへ帰りもす」

「帰る？ 軍艦からか」

「いえ、軍艦が横須賀に帰りもしたで、ここ何日か、ちょっと帰宅させてもらっちょりますが」

「軍艦は何か」

「天城<sup>てんじやう</sup>ごわす」

「おはん、うちはどこじゃったかの」

「築地一丁目でごわす」

「そりゃよか。おいは南茅場町<sup>なやば</sup>じゃ。そっちに廻<sup>まわ</sup>ってやろう。乗ってゆけ  
「いや」

海軍将校は狼狽した。

「それは恐縮ごわす」

「かまわん」

「それに、連れもごわすで」

と、そばをかえりみた。

彼の背後に、すがりつくように立っている女性の姿があった。それが、身体を二つにせんばかりにお辞儀した。

「女房の登喜<sup>とぎ</sup>でごわす。おい、陸軍中将の西郷従道閣下<sup>つぐみち</sup>じゃ」

「そんなら、いよいよ乗るがよか」

西郷中将は微笑して、前の座席にあごをしゃくった。

「それに、いま思いついた事<sup>こと</sup>じゃが、おはんに頼<sup>たの</sup>みたか事<sup>こと</sup>があるのでな」

「何でごわす」

「まず、乗れ」

山本少佐は、もういちどふりむいた。妻の登喜は当惑その極に達して、それだけは許してもら  
うように哀願の眼を夫にからみつかせ、

「あの、お馬車がけがれます。……」

と、小声で、あえぐようにいった。と、それをみなまでいわせず、山本のふとい眉がぐいとあがって、

「そいじゃ、乗せていただこう。乗るぞ！」

と、大喝にちかい声でいい、妻の手をとって、ひきずりあげるようにいっしょに乗りこんだ。

馬車は築地へむけて走り出した。

馬車の中は、二人ずつ向い合って坐るようになってゐる。山本少佐夫妻は、進行方向とは逆にならんで坐った。

西郷従道は四十半ば、兄の故南洲に似て堂々たる体格と風貌だが、山本少佐のほうも、背は一メートル七〇は越え、体重は八〇キロちかいだろう。それもかたくひきしまつて、さらにみごとな口髭、頬からあごにかけての髭と、虎か豹を思わせる眼が、泣く子も黙るといった精悍な印象を与える。まさに偉丈夫だ。

ならんで坐ったその妻は、まだ二十半ばだろう。気品にみちた容貌で、頸ほそく、雪白の肌をした嫋々たる美女で、大木にからみつく秋の花のように見えた。いや、その座にも居たえず、窓外をながれる夕暮のひかりに、いまにも消えいらんばかりの風情であった。

それを、茫洋とした、そのくせぶしつけな眼で、見あげ、見おろし、

「よか、よか」

と、西郷従道はニタリとした。——このとき、やっと気がついたのだが、この人物は少々酔っているらしい。

「よか御内儀じゃな、権兵衛どん」

山本権兵衛、このとし、数えで三十四歳。

二

「閣下、御用っちゅうのは何ごわすか」

山本権兵衛は、やや懺然とした顔でいった。

西郷はわれに返ったようだが、それには答えず、

「それはそうと、おはんら、同伴で仲よくどこへいっちゃったんじや」と、訊いた。

「いま、汽車から降りて来たようじゃが」

「は、女房に軍艦を見せに、横須賀にいつて来もした」

と、山本は答えた。――横須賀が軍港となったのは明治十年のことで、鎮守府が置かれたのは去年のことであった。彼は「天城」の艦長であった。

「ほほう。……」

西郷はまた山本の妻のほうを見た。

「こげな、風にもえたえぬ美しか奥さんに軍艦を」

「それよりや、閣下は、どげんしてまた新橋停車場へ」

と、山本はふしんげな眼をむけた。妻のことから話題をそらすためもあったが、先刻からいだいていた疑問でもあった。

「さっきこの馬車から下りたのは、異人の軍人じゃごわせんかったか」

「ああ、ありゃフランスの海軍士官じゃ」

と、西郷はうなずいた。

「実はきょう、赤坂で観菊の御宴があつてな」

微醺<sup>ひいん</sup>をおびているのはそのせいらしい。宮城は明治六年五月に焼失して、このころに至ってもまだ天皇は赤坂離宮に住んでいた。

「それに招かれた外国人の中にあれがおつた。それが、きょうはじめて会つた男じゃなか。この三日、鹿鳴館で天長節の舞踏会があつたとき知り合つた男で、横浜に碇泊<sup>ていぱく</sup>しとる軍艦から来たつちゅう。それで、おいどんが帰るついでに停車場まで送つて来てやつたんじゃ。たしか海軍大尉で、ジュリアン・ヴィオとかいった。――」

「閣下はフランス語がおわかりになるのでござすか」

「知るものかよ。向うがカタコトで日本語をしゃべってくれたんじゃ。何でも、この夏ずっと長崎におつて、そのあいだ陸<sup>おか</sup>に上つて、日本の女をメカケにして暮しておつたらしか。どうもフランス人つちゅうのは、そのほうは達者なもんじゃな」

と、感にたえたようにいったが、なに、この西郷閣下も女に眼のないことでは有名なものだ。

「おお、それそれ」

西郷中将は思い出したように、燕尾服のどこやらから一枚の紙片をとり出した。

「そのフランスの大尉が馬車から下りる際、鹿鳴館でお見かけした日本の貴婦人たちに、こんど逢つたらこれを披露してくれつちゅうて、こげなものを書いて渡してゆきおつた」

受けとつて、権兵衛はのぞきこんだ。

白い紙に三行ばかり、異国の文字がつらねてある。文字は流麗だが、むろん何が書いてあるのかわからない。

「山本にもフランス語は読めもさん」

「海軍の中にゃ読めるやつがおるじゃろ。それ、おはんに渡しとくから、だれかに読んでもらって、こんど逢うたときに教えてくれ」

と、西郷はいった。この人物らしい野放図さだ。

「こんどまた逢うたときに？」

「うん、逢うことになるらしか」

権兵衛はげんな表情で、

「それで、御用とおっしゃったのはこの事ことごわすか」

と、その紙片を持ったまま、拍子ぬけしたようにいった。

### 三

「うんにゃ、ちがう」

西郷はふとい首をふった。

「その、おとといの鹿鳴館でな、井上伯からおいに、また舞踏会をやっちょくれ、と頼まれた。おいばかりじゃなか。ほかの大官にも同様じゃと思うが、とにかくもっと頻繁に舞踏会をひらかんけりゃ、せっかく鹿鳴館を作った甲斐かいがなか、と。――」

馬車は駈けつづけている。

「それに、どうも婦人の集まりが悪か。その天長節の舞踏会には無理して来てもらったが、それも天長節なればこそじゃ。もっと舞踏会を多く、もっと御婦人が多くならんけりゃならん。で、おいにも協力してくれといわれての。そしてきょうも、伊藤伯から同じ事ことを頼まれた。結局、おいは来年の三月三日、桃の節句の舞踏会を割りあてられた」

「だいぶ先の事ことごわすな」

「なに、すぐに来るわ。とにかくそれは引受けんけりゃならん羽目になったが、その人集めが……特に御婦人を集めるのに自信がなか。そこへいま、ふとおはんの姿を見かけて思いついたんじゃない」

「何をでござす」

「おはん、来てくれんか。内儀同伴でじゃ。こんど逢うといったのはその事ことじゃ。いや、おはんたち二人ばかりじゃなか。枯木も山のにぎわい、といったら怒るじゃろうが、やるなら少しでも盛大になるようにやりたか。でな、仲間の海軍士官たちを誘って、なるべく沢山来てくれるようにすすめてくれんか。若い将校が沢山来りゃ、御婦人連の集まりもさぞよかる。あはははは」

「とんでもなか事ことごわす！」

と、山本権兵衛は大きな眼玉をむいた。

「そげな事こと頼めば、おいは袋だたきにあつて、海に放りこまれもす。日本海軍の軍人は、鹿鳴館でダンスをするために日ごろ訓練しとるのじゃござせん！」

「しかし、いまいったフランスの海軍士官は、ダンスに来たじゃなかか。むろん本国でも、そげな事ことはふつうなんじゃろ」

そのフランス将校が、西郷がこんなことを思いついたヒントになったのにちがいない。

「海軍は海の外に出る。いまのフランス人同様、異国にもゆくじゃろ。あっちの人間とつき合はんけりゃならん事ことも多いじゃろ。西洋舞踏くらい出来んでどげんするか」

「はばかりながら山本は、いままで二回、艦務研究のためヨーロッパやアメリカへいった事ことがござすが、ダンスなどする必要はいちどもござさんかった」

山本権兵衛は吐き出すようにいった。

「だいたい、おいはあの鹿鳴館なるものが甚だ気に入るわんでござすよ。あげな西洋の猿真似は、日本にとって百害あって一利なし、と考えとりもす」

「猿真似というなら、海軍も西洋の猿真似じゃなかか、権兵衛どん。——いや、陸軍とて同様じやが」

と、西郷はケロリといった。

「猿真似も、お国のために必要とあらばやらんけりやならん事がある。おはんは百害あって一利なしというが、伊藤井上ほどのエラモンが、ただの酔狂に浮かれて鹿鳴館など作るはずがなか。めざすところは、幕末に結ばれた不平等な条約の改正を外国に認めさせるこっちゃ。そのために御一新以来いろいろと苦心惨澹、万策つきて、どうかあそこで外国人と踊り、酒も飲み、美人も出せば、魚心あれば水心、あちらも日本を可愛いと思つて、条約改正に応じてくれるじゃろ、ちゅう、涙の出るような策じゃ。おいの見るところじゃ、この猿真似に四十害はあるが六十利はあると思う」

大西郷はあまりしゃべらない人であつた。この小西郷のほうもそれに輪をかけた無口で有名な人物だが、今宵珍しく多弁なのは、少々酔っているせいだろう、と権兵衛は思った。

「これで条約改正が出来りや、軍艦百隻にまさるとも劣らん国益となるぞ。どうじゃ、権兵衛、これもお国への御奉公と思つて、みなを誘つて舞踏会へ出てくれんか」

「そげな理窟はこの山本には通じもさん」

権兵衛はにべもなく首をふつた。西郷従道は、依然にこやかな顔を、こんどはその妻のほうへむけて、